

近代英語協会第 38 回大会

Zoom コンファレンス

—— シンポジウム・研究発表 ——

開催日：2021 年 8 月 21 日（土）

会場：近代英語協会公式ホームページ内の特設サイト

[<http://www.modernenglish.jp/>]

近代英語協会事務局分室

〒470-0195 愛知県日進市岩崎町阿良池 12

愛知学院大学文学部英語英米文化学科 前田満研究室内

電話：0561-73-1111（代） FAX：0561-73-81790

会費振込口座 00810-9-5821

「周辺表現はどのように英語標準化時代を生き抜いたのか

—3つの事例から考える—

司会・講師：柴崎礼士郎 (明治大学教授)
 講師：堀田隆一 (慶應義塾大学教授)
ディスカッサント：渡辺拓人 (関西学院大学助教)

シンポジウム趣意

明治大学教授 柴崎礼士郎

本シンポジウムでは、英語史における標準化や規範化をくぐり抜けて周辺的に生き残ってきた現象に注目する。具体的には、1) 語源的綴り字 (etymological spelling) に焦点を置き、綴り字と発音の乖離、綴り字発音、異綴り語 (variation) など (e.g. *doubt, falcon*) の現代英語までの変遷を追う発表 (堀田担当)、2) 二重最上級 (double superlative) の史的変遷を概観し、先行研究では詳細に論じられていない *bestest, worstest, mostest* などの周辺事例を言語学的に考察する (柴崎担当)、3) 近未来表現 (Immediate Future expressions) に注目し、*be about to~*, *(be) at/on the point of~* などの発達と定着を、とりわけ初期近代英語以降を中心に考察する (渡辺担当)。いずれの事例も、標準化や規範化あるいは言語教育の中心にあったとは言えず、本道から離れた場所での変化と変異と判断できる。こうした周辺事例が、どのような経緯で現代英語まで生き残ったのか、あるいは、定着したのかという謎解きである。

「語源的綴りの英語史上の意義を再検討する —— 初期中英語から現代英語まで」

慶應義塾大学教授 堀田隆一

英語の標準化の過程は 14 世紀後半に始まったが、その動きはラテン語に範をとったルネサンス期に長らく停滞した。標準化が一応の完成をみたのは「理性の時代」と呼ばれる規範主義の 18 世紀のことである。「標準化」「規範主義」ときけば、結果として制定された標準形はさぞかし合理的にちがいないと想像されるだろう。しかし、実際には英語の標準形に

は非合理的なものが多い。代表例として、*doubt* の や *salmon* の <l> にみられる語源的綴字が挙げられる。古典語に傾倒したルネサンス期の学者が、ラテン語の綴字を参照して、要らぬ文字を英語の綴字に挿入したものである。非合理的かつ少数なので、標準英語では周辺的な位置にあるといえる。ラテン語かぶれした語源的綴字の導入は、しばしば現代英語における「発音と綴字の乖離」の元凶として非難されてきた。しかし、語源的綴字の通時的な側面 —— 初期中英語期から現代英語期にいたるまでの歴史 —— を眺めてみると、この周辺的な現象は異なる様相を帯びてみえてくる。本発表では、いかにして語源的綴字が標準化の過程に組み込まれたかに注目しつつ、同現象の英語史上の再評価を目指す。

「適者生存？ — 二重最上級 *bestest* と *worstest* から考察する近現代英語」

明治大学教授 柴崎礼士郎

本研究は、後期近代英語に創発した二重最上級 (double superlative) の史的変遷を概観し、どのような経緯で現代英語まで生き長らえたのかを考察する。OED3 によると、*bestest* は 1751 年、*worstest* は 1768 年という標準化の渦中に創発され、*bestest friend* 「無二の親友」のように強調する場合や修辞効果を銜う場合には現代英語でも依然使用されている。Moessner (2017) は、二重比較級と二重最上級は初期近代英語期を通じて減少するが、後期近代英語期以降は、特に単音節形容詞に屈折型が好まれるようになると指摘する (e.g. Dons (2004))。こうした史的経緯を鑑みると、*bestest* と *worstest* が後期近代英語期に創発したのは偶然ではなく、*bettermost* などとの類推によるものと考えられる。類推は規則に基づく推論での説明が困難な場合が多く、Traugott (2017: 55) も「類推が言語的な変化に至る場合は多くない」と述べている。一方で、本研究が取り組む系列的な変化に目を向けると、類推は功を奏するように思える。

<参考文献>

- Dons, Ute. (2004) *Descriptive Adequacy of Early Modern English Grammars*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Moessner, Lilo. (2017) "Standardization," in Alexander Bergs and Laurel J. Brinton, eds., *The History of English: Early Modern English*, De Gruyter Mouton, Berlin, 167-187.
- The Oxford English Dictionary* online (OED3), Oxford University Press, Oxford. (<http://www.oed.com/>)
- Traugott, Elizabeth C. (2011) "Grammaticalization and Mechanisms of Change," in Heiko Narrog and Bernd Heine, eds., *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, Oxford University Press, Oxford, 19-30.

「近代英語における近接未来表現の出現と拡大」

関西学院大学助教 渡辺拓人

未来表現の歴史の中で最近生じた変化のひとつは、近代英語における近接未来表現の出現と拡大である。*be going to* と *be about to* はともに近代英語期に文法化し (Danchev and Kytö (1994); Mair (2004); Watanabe (2011))、現代英語でも代表的な形式である。しかし近代英語期の文法書の記述に照らすと、両者の扱いは異なったようである。最初期の記述としてよく引用される Poole (1646) *The English Accidence* は *be going to* と *be about to* を併記しているが、その他の初期の記述について、Dons (2004: 127-128) や Michael (1970: ch. 13) の挙げる文法書を紐解くと、*be about to* は一定して言及があるのに対して、*be going to* は 18 世紀後半まではほとんど言及されないという違いが認められる。さらに 19 世紀には、*be going to* の使用は一部の文法家による批判の対象となったようである (Anderwald (2016: 51))。つまり、文法書での扱いという観点から考えると、*be about to* は一貫して標準的表現であった一方、*be going to* は周辺から標準へ進出した表現とみなせるであろう。本発表では、このような近代英語期の文法書の記述と比較しながら、*be going to* と *be about to* の発達について考察したい。

<参考文献>

- Anderwald, Lieselotte (2016) *Language Between Description and Prescription: Verbs and Verb Categories in Nineteenth-Century Grammars of English*, Oxford University Press, Oxford.
- Danchev, Andrei and Merja Kytö (1994) “The Construction *Be Going To* + Infinitive in Early Modern English,” in Dieter Kastovsky ed., *Studies in Early Modern English*, Mouton de Gruyter, Berlin, 59-77.
- Dons, Ute (2004) *Descriptive Adequacy of Early Modern English Grammars*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Mair, Christian (2004) “Corpus Linguistics and Grammaticalisation Theory: Statistics, Frequencies, and Beyond,” in Hans Lindquist and Christian Mair, eds., *Corpus Approaches to Grammaticalization in English*, John Benjamins, Amsterdam, 121-150.
- Michaels, Ian (1970) *English Grammatical Categories: And the Tradition to the 1800*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Watanabe, Takuto (2011) “On the Development of the Immediate Future Use of *Be About To* in the History of English with Special Reference to Late Modern English,” *English Linguistics* 28, 56-90.

司会 川端朋広 (愛知大学)

1. 「エリザベス朝演劇における be 動詞の後の人称代名詞の格について」

京都大学大学院生 井上 瞬

主格補語をはじめとする be 動詞の後の位置の人称代名詞は、*it is I/me* のように主格と目的格のいずれも取り得ることが知られており、初期近代以降に当該の位置における目的格の使用が広く見られるようになったとされる。しかし、これまで初期近代英語期を対象とする研究においては、Abbott (1870) や Spies (1897) のような記述的な研究がなされるばかりで、量的な調査は十分になされてこなかった。また、記述的な研究においても、William Shakespeare に重点が置かれる事が多く、他の劇作家の作品については十分な注意が払われてこなかったと言える。本発表では、先行研究において目的格の使用が指摘されている複数のエリザベス朝の劇作家の全戯曲をコーパスとし、量的な調査を行った結果を示す。また、目的格が使用された各々の用例について、複数の要因を検討する。

<参考文献>

Abbott, E. A. (1870 [2003]) *A Shakespearian Grammar: An Attempt to Illustrate Some of the Differences between Elizabethan and Modern English*, 3rd ed., Dover, New York.

Spies, Heinrich (1897) *Studien zur Geschichte des englischen Pronomens im XV. und XVI. Jahrhundert (Flexionslehre und Syntax)* (Studien zur englischen Philologie, Heft 1), Max Niemeyer, Halle (Saale).

2. 「NP as we know it 構文の通時的発達について」

京都大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 DC2 佐藤嘉晃

現代英語においては、(1) のような直前の名詞句を修飾する、形容詞的機能を持つ as が存在する。

(1) If one is to believe their claims, life as we know it is about to end. (COCA)

この種の as を含む表現の基本的な共時的特徴 (e.g. as 節動詞の典型は認識動詞) は八木 (1996) などで記述されている。また、(1) のように as 節動詞が know の場合、この種の as を含む文の

大半 (i.e. 全体の約 85%) が消滅を中心に、起源や変化といった事態を表すことが佐藤 (2020) では指摘されている。

しかしながら、当該表現がどのような通時的発達を遂げたのかは明らかにされていない。本発表では、主に史的コーパス *Corpus of Historical American English* のデータに基づき、当該表現の現代における特異的傾向はもともと存在していたわけではなく、段階的に獲得していったものであること示す。さらに当該表現の特性が、初期の特徴からどのような要因を伴って、いかにして成立したのかという形成過程を、事態のタイプに加え、as 節主語や被修飾名詞など複数の要素に着目して、構文化 (cf. Traugott and Trousdale (2013)) の観点から、明らかにする。

<参考文献>

佐藤嘉晃 (2020) 「主語名詞 (句) を修飾する as 節とその文の特徴—NP_{subj} as we KNOW it VP 構文を中心に—」英語語法文法学会第 28 回大会。

Traugott, Elizabeth and Graeme Trousdale (2013) *Constructionalization and Constructional Change*, Oxford University Press, Oxford.

八木克正 (1996) 『ネイティブの直観にせまる語法研究』研究社, 東京。

司 会 福元広二 (法政大学)

3. 「初期近代英語戯曲における不定詞節を伴う wh 関係節について」

専修大学講師 菊地翔太

現代英語では、wh 関係詞が to 不定詞に前置され、to 不定詞節内で機能を持つという現象は、前置詞随伴の不定詞関係節で典型的に見られる (e.g. She is the ideal person in whom to confide. (Huddleston and Pullum (2002: 1067)). 初期近代英語では、wh 関係詞と to 不定詞節はより幅広い統語環境で共起し、先行する wh 関係詞が名詞的用法や副詞的用法の to 不定詞節内で目的語の機能を持つことがある。また、現代英語とは対照的に非制限的な用法が特徴的である。

本発表では、初期近代英語戯曲の大規模コーパスである Expanded Drama 1700 corpus を用い、wh 関係詞と to 不定詞節が共起する様々な構文の使用状況を俯瞰し、William Shakespeare と John Fletcher の用法を通時的・共時的視点から比較・分析する。次に、調査結果を踏まえ、二人の劇作家の合作と考えられている *Henry VIII* と *The Two Noble Kinsmen* に見られる用例が、これらの戯曲の執筆分担についてどのような示唆を与えるかを考察する。

■ 研究発表 第二部 15:40—17:00

司会 岡崎正男 (茨城大学)

1. 「知覚動詞と使役動詞補文に出現する準動詞がもつアスペクト特性の発現時期について」

日本大学大学院 村岡宗一郎

PDE の知覚動詞は原形不定詞と現在分詞を補文にとる。このうち、原形不定詞は完結性を表す一方で、現在分詞は非完結性を表すという (cf. 江川 (1991³: 333))。この準動詞について、Stewart (1976: 36) は OE から ModE における補文内部の準動詞には意味的曖昧性があると述べ、盛田 (2007: 153) は準動詞に見られる意味的差異は EModE 以降見られるという。このことについて、EEBO を用いて調査を行ったところ、(1) のような例が確認されたが、PDE では、(2) に示すように容認されない。

(1) a. thus Iacob the sonne of isaac *sawe a ladder stand* vpon the earth, (1582. EEBO)

b. whensoeuer wee *see the church stand* in neede of our helpe, (1583. EEBO)

(2) a. I *saw Bill* {*leaning/lean*} against the side of the house.

(Kirsner and Thompson (1976: 220))

b. I *saw the ladder* {*leaning/*lean*} against the side of the house. (ibid.)

本発表では、PDE では容認されない表現が通時的にどれほど散見されるかを中心に、EEBO を用いて知覚動詞補文に出現する準動詞のアスペクト特性の発現時期を明らかにしていく。また使役動詞補文における準動詞の分布について調査を行った村岡 (2018) などの分析と比較し、知覚動詞と使役動詞補文に出現する準動詞のアスペクト特性は EModE 以降発現し、LModE 以降確立したと主張する。

<参考文献>

江川泰一郎 (1991³) 『英文法解説 改訂三版』金子書房, 東京.

Kirsner, R. S. and Thompson, S. A. (1976) "The Role of Pragmatic Inference in Semantics: A Study of Sensory Verb Complements in English," *Glossa* 10, 200-40.

村岡宗一郎 (2018) 「使役動詞 make の補文内部の統語構造における通時的研究」口頭発表. 日本中世英語英文学会第 34 回大会. (於愛知教育大学)

盛田義彦 (2007) 『欽定訳聖書の動詞研究』あるむ, 東京.

Stewart, A. H. (1976) "The Development of the Verb-Phrase Complement with Verbs of Physical Perception in English: Historical Linguistics as a Source of Deep Structures," *Journal of English*

2. 「worth/worth while の新用法に関する史的統語分析」

愛知大学准教授 本多尚子

英語において、worth は直接名詞句補部をとることができる特殊な形容詞であり、動名詞句補部をとることもできる。当該の動名詞句は遡及的動名詞とも呼ばれ、動名詞化されている動詞は他動詞であり、その目的語に相当するものが主節の主語と同じであると遡及的に解釈される。このような遡及的動名詞を含む文は worth 構文と呼ばれる。

他方、同様の意味を表す別タイプの構文として、worth while 構文がある。worth while 構文は to 不定詞句補部をとり、他動詞も自動詞も含みうる。また、worth while 構文は常に形式主語 It を伴い、通常の名詞句を主語にとることは許されない。

このように、worth 構文と worth while 構文においてはその意味的類似性にも関わらず、少なくない統語的違いが存在するため、両者の混用とされる用例は許されないとされてきた。しかしながら、本研究の史的・共時コーパス調査の結果、複数の該当例を発見した。本研究では、これらを、両構文の生起頻度が高まるにつれ両者が混用された結果生じた新たな worth の用法と考え、当該構文の出現を理論的に説明可能な統語分析の提案を試みる。

■ 講演 17:10—18:10

司会 米倉 綽 (京都府立大学名誉教授)

「英語史研究における部分と全体」

筑波大学・聖徳大学名誉教授 藤原保明

漢字学者の白川 静氏は『回思九十年』(2000: 128-9) の中で「ものに部分というものはない。部分は、全体に対して、全体の中においてある。部分が明らかになるときは、同時にその全体が理解されるときである。全体がわかるということは、その体系が把握されたということである。体系として、また歴史的に、つねに全体としてとらえる。」と述べている。英語史を「全体」、近代英語を「部分」とみなすと、近代英語がわかるということは英語史が理解できているということである。古英語、中英語、現代英語についても同様である。それならば、近代英語期の GVS という事象を理解するには、中英語期の語末の ⟨e⟩ の黙字化や現代英語の day [deɪ] , bow [bəʊ] などの「出わり」の [ɪ, ʊ] の機能などが把握できていなければならない。場所の副詞の there が存在文の主語になる事象についても同様である。この講演では英語史研究の在り方について考察する。